『マルテの手記』における一人称の語り手

――物語ることと思い出すこと

富山典彦

一

詩人であるリルケ生涯ただ一つの長篇小説（Roman）『マルテの手記』を読んだ時に、われわれがまず突き当たらざるを得ない当惑は、「一体これが小説なのだろうか？」という素朴な疑問である。もっとも、小説（Roman）というジャンルは、詩（Lyrik）や戯曲（Drama）に比べるとずっと自由な形式なのだから、さまざまな形の文学作品をわれわれは「小説」として同じジャンルに入れている。ゲーテの『若きヴェルターの悩み』もドストエフスキーの『罪と罰』もカフカの『城』もセルバンテスの『ドン・キホーテ』もギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』もロベルト・ムージルの『特性のない男』もジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』もロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』も……およそ数え上げれば枚挙にいとまがない。もしもわれわれが「小説とは何か」という問いに対する明確な答えを持っていて、その答えを判定規準にして個々の作品を小説というジャンルに入り得るものかどうか判断しているのだとすれば、『マルテの手記』について「これが小説なのだろうか」などという疑問は起こらなかったに違いない。しかし残念ながら、そのような答えをわれわれは知らないし、そのようにして小説というものを読んでいるわけでもない。形式という点では全く自由な小説から、それら個々の作品のすべてに共通する形式原理を導き出すということは、不可能とまでは言わないにしても、極めて難しいことと言わねばなるまい。その反面、一見小説らしい体裁をとりながら、明らかに小説とはいえない作品（小説でない以上それはそもそも「作品」ではないのかもしれないが）が数多く存在していることもわれわれは知っている。その際われわれが何を判断の基準にしているかといえば、形式上の問題ではなく、ごく曖昧な概念には違いないが、何か内容に関わることであり、それをもう少し突き詰めて考えれば、ある作品が小説である限り持っていなければならない価値の問題である。従って「小説とは何か」という問いを発した時、そこには価値評価が含まれていなければならないことになる。その作品が小説であるならば、まずそう評価できるだけの価値を持っていなければならないのである。

では、その価値とは何か？――ルカーチの言うように[1]小説（Roman）を時代との関わりにおいて理解すべきものと考えるならば、その価値は小説の持つ文学的・芸術的側面よりはむしろ歴史的・社会的側面から検討されるべきものであるかもしれない。逆にヴォルフガング・カイザーの解釈学の立場からすれば[2]、小説をそれ自体で完結したものと捉え、その価値は小説の内在的エネルギーから生まれ出てくるべきものと考えられるかもしれない。一口に小説の価値と言っても、その問題はそれ自体ですでに途方もない問題であるに違いない。いずれにせよ、われわれが感じた素朴な疑問の背後にはとてつもない大問題が潜んでいるわけだが、個々の生が時代と関わりつつその内在的エネルギーから無限の変転の形式を生み出すものであるのと同様、小説という文学上の一形式

もまたそれ自体で完結し終息するものではなく、自己増殖してやまない生を内包したもの、生そのものの一形式としてわれわれは取り敢えず理解しておこう。何故ならば、「小説は死んだ」などと宣告されるあとから次々と世に生まれ出てくる生を、今もなお小説が失わずに持ち続けているからである。生が無限に変化する可能性を持った形式でありながら、なお一定の内的構造と変化のメカニズムを持った有機体であるように、小説もまたそのような有機体である。だから、本稿でわれわれは『マルテの手記』が小説であるか否かという問題を解こうとするのではなく、『マルテの手記』を一個の有機体として捉え、その内的構造を探ることによって、二十世紀初頭という時代そのものの問題への糸口にしたいと思うのである。

それならば、われわれが最初に感じたあの素朴な疑問は、有機体としての『マルテの手記』の内的構造とどのように関わっているのだろうか？――ごく表面的に考えるならば、『マルテの手記』が一篇の小説と呼ばれるには余りに日記風のバラバラな断片の寄せ集めにしかすぎないように見えることを、まず第一にわれわれは挙げることができるだろう。ゲーテの『若きヴェルターの悩み』のような書簡体小説でも、ヴェルターの最期の場面を除けば、全体がその都度ヴェルターが友人に宛てて書いた手紙によって構成されていて、一つ一つの手紙は確かにバラバラな断片に見えるかもしれない。しかし決してそうではなく、かえって一つ一つの手紙に主人公の真情がこめられていて、若き主人公の人妻への叶わぬ恋とその破局という一貫した筋が、緊迫した劇的構成によって読む者の胸に直接響いてくると評価してよかろう。それに対して『マルテの手記』では、そのようなはっきりした筋は存在していない、いや、少なくとも存在していないように見える。一般的に言って、小説の構成を考える時まずわれわれは起承転結ということを思いつくわけだが、それが必ずしも小説の不可欠の構成原理ではないとしても、少なくとも一般の読者がその作品を小説らしく読むための基本的原理ではある。そもそもある架空の出来事が、過去に実際に起こったこととして語られるのが小説の成り立ちであるとすれば、その語りの時称として過去時称が好んで用いられる。[3] しかもその過去時称はただ過去の事実を述べる場合だけに用いられるのではなくて、語り手が今眼前にしていることを読者に伝える場合にもよく用いられる。小説の作品世界は語り手が物語るという行為によって成立し存続するのであって、その語り手が小説の作品世界とどのように関わっているかを分析することによって小説を幾つかの類型に分類することができる。[4] フリードリヒ・バイスナーはカフカについての講演のなかで、「現代の小説の奇形は、とりわけ語り手の立脚点の喪失によって惹き起こされている」[5] と言ったが、その言葉はカフカの長篇小説における語り手の不在ということを言うための前置きであると同時に、現代の作家たちが小説を書く際の可能性の一つを裏返しに言い当てているのではないだろうか。というのは、語られるべき一つの事実がある場合、その事実自体は不変のものであったとしても、それを語る語り手をどの位置に設定するか、あるいは語り手とその事実とにどのような関係性を持たせるかによって、幾通りもの語りの可能性が生じてくるからである。そういう可能性を念頭に置いて『マルテの手記』を読み直してみると、それまでは一見して一貫した「筋」のないバラバラの断片の寄せ集めにしか見えなかったものが、丁度磁石に吸い寄せられて整然とした模様を描く鉄粉のように、一つの有機的な全体が現われてくる。それは普通にいう小説の「話の筋」というようなものではなく、より内的な力、言わば語りそのものに内在する潜勢力とでも言うべきものである。それが何であり、まだどのようにしてそれが作品の部分を一つの有機的全体に形造っているのか、そしてまたそれが現代文学においてどういう意味を持っているのか、そういうことを本稿で問題にしていきたいと思う。

二

従来の『マルテの手記』解釈にはおよそ次の二つの方向が考えられる

のではないかと思われる。つまり、作者であるリルケ自身の生涯にわたる詩作過程、初期の詩から出発し、『時禱集』・『形象詩集』・『新詩集』を経て、『ドゥイノの悲歌』・『オルフォイスに寄せるソネット』へと昇りつめるリルケの詩人としての足跡にこの『マルテの手記』を位置づけようとする解釈[6]と、二〇世紀初頭の作家たち、カフカ、ムージル、プルースト、ブロッホ、ジョイスといった現代文学の旗手たちの仕事とこの『マルテの手記』とを並べて、『手記』を現代小説の新しい方向を指し示すものとする解釈[7]である。『マルテの手記』の中から『悲歌』や『ソネット』へと成熟していく主題を拾い出すことはそれほど難しい作業ではないだろうし、その成熟過程を考察することはまた実り多いことだろうと思う。また、『マルテの手記』における語りの新しさは二〇世紀初頭の小説の中で、たとえフュレボルンによって「現代小説ではない[8]」と結論されることがあったとしても、それなりに意義あるものだろうと思う。だから、この解釈の二つの方向は互いに矛盾対立するものではなく、言わば『マルテの手記』というゴブラン織りの縦糸と横糸となり、一つの模様を織り上げているのである。

一九〇四年にローマで書き始められ、一九一〇年にライプツィヒで完成されるまでの相当に長い時間[9]と、そして書き終えた後もう何も仕事をする力が残っていないと述懐するほどのこの作品への打ち込み方[10]、さらに『マルテの手記』の下敷きになったと考えられるリルケ自身のパリでの孤独な下宿生活とロダン体験・セザンヌ体験、そういった要素を考えるならば、『マルテの手記』はパリで自殺したスウェーデンの若い詩人をモデルとする架空のデンマークの詩人マルテの『手記』であるよりはむしろ、詩人としてしか自己の生の根拠を見出し得なかったリルケ自身の『手記』である。そうだとすれば、『マルテの手記』の中に『悲歌』や『ソネット』へと成熟していく要素を読み取ることは容易なはずだ。一方『マルテの手記』の作品構成の点を考えてみると、この作品は初稿と第二稿では主人公のマルテが三人称で作品の中に登場し、作品中の聞き手に向かって一人称の形で物語るという枠小説の体裁をとっていた[11]。

枠小説という小説の伝統的な形式を二度にわたって試みながら、結局はその形式を捨てて「手記」という形式で決定稿をものしたところに、リルケのどのような意図があったかということは別にしても、二〇世紀初頭という時代の大きな潮流がそこに聞こえるような思いがする。一九世紀小説から二〇世紀小説へと転換する新たな可能性をリルケはわれわれの前に示してくれたのである。一見ただ雑然と並べられただけの断片の寄せ集めにしか見えないこの作品は、すでに何人かの研究者が指摘しているように[12]、一つ一つの断片の主題が次の断片の主題を呼び起こし、緊密な内的つながりを保ちつつ一つの全体が形造られるよう綿密に計算し尽くされて配列されているのである。そう考えれば、この形式もまた、詩人の思想を映し出した単なる「手記」であるにとどまらず、二〇世紀小説の新しい可能性の扉を開く一形式であると評価していいのではないだろうか。

それならば、この形式の意義はどこにあるのだろうか。それを一言で言うとすれば、一見まとまりのないように見える個々の断片が、語り手であるマルテの書くという行為（それは語るという行為を意味する）それ自体によってある隠れた統一性を与えられているということである。「一人称小説では語り手は描かれた世界のなかの人物として登場する。彼は自分が体験したり観察したり、あるいは小説中の他の人物によって聞き知ったことを物語る[13]」とシュタンツェルは一人称小説を定義したが、『マルテの手記』は一応その定義にあてはまり、従って一人称小説の類型に属するものと考えてよい。「一人称小説は非常に変化する力をもった類型であり、その豊かでさまざまな描写能力は今日に至るまでまだ完全に使い尽くされたわけではない[14]」とシュタンツェルは続けて言うが、そうだとすれば『マルテの手記』はまたこの一人称小説の類型の一つの変化形であるとも考えられる。というのは、語り手であるマルテは確かに「自分が体験したり観察したり、あるいは小説中の他の人物によって聞き知ったこと」を物語っているには違いないのだが、それをただ客観的事実として物語っているのではなく、語るにつれて語っている主

体の方にある変化が起こってくるからである。過去の出来事を物語っている時でさえ、すでに完了し確定した事実として物語ることができるのではなく、物語っている現在との密接な関わりなしには不可能なのである。言い換えれば、『マルテの手記』では過去の出来事は客観性をもった事実ではなく、曖昧で不確かな記憶の底から思い出すことによってはじめて現在に立ち現われてくるものなのである。一方、それを語っているマルテの方は、それら過去の体験を物語ることによって現在の自己を保持し確保している。極端な言い方をすれば、語られる事実が語り手の語るという行為なしには存在し得ないように、語り手自身もまた語るべき事実を語ることによってはじめてここに存在を明かすことができるのである。図式的に単純化すれば、語り手と語られた事実とは語るという行為を間にはさんで、このような相互関係にある。ただしこの相互関係は、語りが進むにつれて微妙に揺れ動くことになるわけだが、その微妙な揺れが同時にまたこの作品に比類のない陰影を与え、この作品をリルケの「最も円熟した最も純粋な抒情詩」[15]とまで評価させるに至らしめている。

一人称の語り手と語られる事実とのそのような関係に加えて、語るという行為そのものに大きな作用がある。ステファンスによれば[16]、この作品は三つの層――パリ・少年時代・「歴史的」人物――から構成されているというが、その三層構造は語るという行為そのもののもたらす軌跡として理解されなければならない。何故ならば、語るという行為は語り手マルテにとって、パリという異邦の大都市での孤独な生の恐怖に対抗することを意味し[17]、語ること、つまり『手記』を書くということが「すべての結末」[18]なのだから。言い換えれば、何か書くべきこと、語るべきことが最初から厳然と存在しているのではなく、聞き手のいない自己閉鎖的な行為でしかない語り（その意味ではそれは本来の「語り」とは異なっている）を通じて、言わば自然に紡ぎ出され織り上げられていくのである。従って、語り手と語られる事実との相互関係は、語るという行為そのものの内在的エネルギーに依存しているものと考えられる。語り手自身の内面性もまた、語るという行為を通じて次第に形成され現われてくる。極端な言い方をすれば、語り手マルテは語ることなしには存在することができないとさえ言うことができるのである。語るという行為によってかろうじて語り手は自己を支え、自己を形成する力を得ている。だから、敢えてここであらかじめ総括して言っておくとすれば、『マルテの手記』は語られた事実そのものよりはむしろ、語るという行為自体の方に重心があり、その語るという行為の過程が、一見バラバラで統一性のないように見える個々の断片を次々と生み出し、同時にそれらの断片を見えない所で緊密に結び付け統一し、さらに詩人として自己を確立しようとしている語り手自身の自己形成にまであずかっている。では、次にその語りの過程を概括的に追っていくことにしよう。

三

大都市パリの孤独の中で、語り手マルテがその『手記』の第一ページに書き付けるものは、外に出て自分の見てきた人々の有様と街、特に病院の様子である。それは、「そこでここへ人々は生きるためにやって来るのだが、ぼくにはむしろここで死んでいくようにしか思えない」[19]という『手記』の書き出しの一文を裏書きするような陰惨な人々の姿と風景である。そこに例えば時代そのものの悲惨を読み取ることも可能であり、またそこに語り手自身の内面の不毛が投影されていると考えることもできるだろう。そういう理解の仕方が間違っているなどと言うつもりはないが、目に見えるものが単に語り手の内面の風景の投影である以上に、その目に見えてくるものが「見ること」を通じて、見ている主体の側の内面の奥深い所、語り手自身にさえ意識されていなかった内奥へと直接入り込んでくるのである。仮に目に見える現実の風景が語り手の内面の投影であるとしても、その内面とは語り手の意識の領域の中にある内面ではなく、その先のもの、意識の外部というより意識の奥底、意識下の領域内の内面でなければならない。というのは、「見ること」につ

いて次のようなことが書かれているからだ。

「どういうわけか知らないけれど、すべてがぼくの中に深く入り込んできて、普通はいつも行き止まりになる場所で止まったままにならないのだ。ぼくにはぼくの知らなかった内面がある。すべてのものは今そこへ向かって行く。ぼくはそこで何が起こっているのか知らない」[20]

「見ること」を通じて、見られたものが見る者の意識下の世界に押し入っている、そういう体験は既成の事物の輪郭を打ち砕いていくだろう。今更ここで付け加えるまでもないことだが、この「見ること」は『マルテの手記』の中で重要な役割をするばかりではなく、リルケの詩作態度の基本理念でもあった。「見ること」は、対象をただ客体として客観的に観察することでもなく、またその反対に内面を外部の事象に投影することでもない。見られる対象が見る主体の内面に奥深く入ってくるということは、逆に言えば主体の意識を対象の中へ奥深く没入させ、そこであわや意識が失われそうになる寸前までいくことである。だから、ここでは内面と外面、主観と客観といった古典的な対立関係がもはやそれほど意味をなさなくなっている。その結果、それまで一見確定し安定していたはずのこの世界の事象が、「見ること」によって明確な輪郭を失い始める。そのことは、例えば人の顔についての次のようなグロテスクな記述がよく物語っている。

「数多くの人間が存在しているが、しかしそれより一層多くの顔がある。というのはどの人間も幾つか顔を持っているからだ。」[21]

顔というのは言わばその人の全体を最もよく表現した器官であり、一人の人間に二つ以上の顔があるというのは普通に考えれば明らかに理不尽なことである。顔が一つしかないからこそわれわれはその人間が何者であるかということを一瞬にして摑むことができるのだが、しかし、人間存在というものをもう一歩突っ込んで考えるならば、そういう簡単な方法でその人間の全体を捉えることはできない。そうだとすれば、人間全体を最もよく表現している顔は複数でなければならないことになる。人の顔についてのマルテのこの考察は、現実をただ客観的に観察するだけでは成り立たない。対象を冷静に虚心に見つめながら、その対象の表面を突き抜け、その奥にあるものへと踏み込んでいかなければならない。それに対応して、丁度嵌め込み式の蓋と味のように、対象が見ている主体の内面のやはり奥深い所にまで入り込んでくるのである。ここで思い出されてくるのは、リルケがこのようなことを書いていたのとほぼ同時期（一九〇二年）にホフマンスタールが書き記していたあのチャンドス体験である。

「もはやぼくにはそれを習慣の単純化する眼で捉えることができなくなってしまいました。すべてのものが部分に解体し、その部分がまた細分化し、もはや何も一つの概念で包括することができなくなってしまいました。一つ一つの言葉がぼくの周囲を泳ぎ回り、それらが凝固して目となり、ぼくを見つめ、ぼくはまたそれにじっと見入らざるを得ませんでした。それらは、見下ろすとぼくに目眩を起こさせる渦巻で、絶えず旋回し、そこを突き抜けると空虚の中へと入って行くことになるのです。」[22]

言葉というものが、その言葉によって指し示される事物や観念との密接な対応関係を失った現代的状況がここに如実に示されているわけだが、その言葉が今や現実の存在と切り離されて空虚の周囲を漂い流れ渦を形造っているのである。言葉が事物との結び付きを失ったということは、事物を言葉によって捉えること、従って世界を概念によって捕捉することの不可能を意味する。そうなってくると、言葉によって客観的事物を把握しようとする主観の側に言い知れぬ不安が拡がってくるだろう。つまり主観の周囲の客観の世界が、主観の把握能力の彼方に行ってしまい、それ自体の不可知の必然的法則に従って動き始めてしまうのである。ここでまたわれわれはカフカの『審判』と『城』とを思い出すだろう。カフカもまたホフマンスタールやリルケとほぼ同じ頃『ある戦いの記述』という習作を書いていたが、この作品でも言葉と事物との関係の動揺が問題になっていた。それがその後に、主観の側からは完全に隔絶し理解不能で、しかも主観の存在の根底に関わりその存在を危うくす

る『審判』や『城』の恐るべき世界へと展開していくことになる。こうしてみると、言葉と事物との関係の危機が二〇世紀初頭の詩人（Dichter）の出発点であったのではないかとさえ思われてくる。その同じ出発点をどのように出発し、その後どのように走っていくかということは、それぞれの詩人の固有の問題でもあろうが、同時にまた二〇世紀前半の大きな時代の問題でもあろう。というのはその半世紀に二度にわたる世界大戦が勃発し、しかもそれが近代の黎明以来人類が信じてきた文明の中に潜んでいたとてつもない危機をわれわれの前に曝すことになるからである。話が大風呂敷になりすぎて中味がなくなってしまったが、『マルテの手記』で早くも言われた「見ること」は、そのような時代的危機の予兆であるように思われて仕方がない。詩人たちはそれぞれの直感でそうした危機を感受し、表現への道に苦悶したに違いない。しかもこの場合、肝腎の言葉自体が危機的状況に陥入っているのだからなお始末が悪い。そういう危機表明の後、ホフマンスタールは詩を捨てて別の道に生き、カフカはひたすら小説を書くことに生き、そしてリルケはあくまでも詩の世界に固執する。『マルテの手記』の中ですでに彼は次のように予告している。

「詩を書くためには待たなければならない。そして一生の間かかって意味と蜜とを集めなければならない。しかもできるだけ長い間かかって。そしてやっと最後に、もしかしたらいい詩の十行を書くことができるかもしれない。」[23]

十代にしてすでに夭折の雰囲気を身にまとった早熟の天才詩人であったホフマンスタールに対し、何年もかかって『ドゥイノの悲歌』を苦吟しているさなか、一気呵成に『オルフォイスに寄せるソネット』を書き上げる晩年を持ったリルケというこの対照的な二人の詩人それぞれの歩いた道に、二〇世紀文学の出発点とその後の運命的な歩みとが象徴的に現われているように思われるが、[24]そのことは将来の課題にしておこう。

ここでもう一度話を本筋に戻し、『マルテの手記』における語りの過程を追ってみることにしよう。パリの現実を「見ること」から『手記』は書き始められたわけだが、見えてくるものはまず第一にパリの現実の生の悲惨な姿であった。生の貧困と悲惨が見えたならば、当然次にくるものは、その生の帰結としての死の様相である。パリの中心部シテ島にあるオテル＝ディユ病院での「工場のような」[25]大量生産的な死の姿――「自分自身の死を持ちたいという望みはますます稀なものになっている」[26]とマルテは書く。大都市に流入してきた人々の生それ自体がもはや固有性を失い、出来合いのものになっているのだから、死もまた必然的に固有性を失い「死の時間に二フラン」[27]支払うだけのことで事足りてしまう。マルテの恐れているのは死ぬこと自体ではなく、このような固有性を喪失した出来合いの死を死ぬことである。同時にそれは翻えって考えれば、喪失した固有の生を取り戻したいという願望でもある。マルテにとって固有の生を生きることが、詩人としての自己を確立するための必要条件の一つである。固有の生のない所には詩もまた生まれ得ない。しかし、現実のパリのどこにその願望を満たすような生が存在しているだろうか。そこで『手記』に一つの大きな転機が訪れる。それは、固有の死を持つことのできた過去への回帰である。過去への回帰とはとりもなおさず語り手の記憶を今ここに呼び戻すことである。

「今はもう誰もいない故郷の家を思い返してみると、以前はこんなふうではなかったに違いないと思うのだ。以前は（もしかしたらただそのように感じていただけのことかもしれないのだが）死を自分の中に、丁度果実が種子を中に持っているのと同じように持っていることを、人は知っていた。」[28]

ステファンスの言う、この作品の構造をなす第二の層、少年時代が、死の有様を契機にして現在のパリのアンチ・テーゼとして語り手の意識の表面に上ってくる。それはまた「見ること」の結果であり、「見ること」を通じて見られる対象が見ている主体の意識下の世界から、意識の奥底に忘れられたまま放置されていたものを呼び起こすのである。「見ること」において主体と客体との間の明確な境界線が消失したように、この場合も現在と過去とを隔てるものの明瞭性は次第に失われていくこ

とになる。現在の現実も過去の現実も、どちらも今それを書いていること、語っていることによってはじめて現在化（veregenwärtigen）されるという点では等しい現実である。過ぎ去ってしまった時間が過去の現実を語り手から遠ざけているとすれば、現在の現実もまた同じ程度に異邦の孤独が語り手をそれから遠ざけている。逆に過去の現実は、すでに完了し確定したこととして客観的な叙述の対象とはなり得ず、今それを思い出し、物語るということをしないならばもともと存在しなかったのと同じように、忘れ去られたまま放棄されることになる。そうだとすれば過去の事実というものは過去よりはむしろ現在に属するものと考えなければならない。固有の死が存在しなくなった以上、大量生産的なお仕着せの死を死ぬことへの恐怖、「その恐怖に対抗してぼくは何かやってみた、つまり一晩中坐って書いていたのである」[29]とマルテは言う。この時マルテが何を書いていたのかといえば、故郷、つまり過去には存在していた固有の死の様相、特に祖父である老侍従ブリッゲの凄じい死の姿であり、また固有の死についての考察である。[30]語り手にとって書くこと、つまり語ることの基本的な意義がここで明らかにされている。語ることとはこの場合出来合いの生と死から自己を守り、自己に固有の生と死を見出すための持続的な努力の過程である。

「見ること」から始まり、その結果として死のあり方をめぐって過去の現実が「語る」という行為を通じて現在の中へと、言わば降霊呪術のように呼び出されてきたわけだが、未だそれは完全に成就されていない。何故ならば「そのすべて（＝少年時代の思い出）に達するためには、もしかしたら人は年を取らなければならないのかもしれない」[31]からだ。今物語ることによって少年時代の不確かな記憶をここに呼び出したとしても、それはまだ本当の意味で過去を現在化したことでもないし、過去に回帰したことでもない。従って自己に固有の生と死とにまだ到達してもいない。それが可能になるためには、年を取ること、遠い未来が現在に向かってやって来ることを長い時間待たなければならない。遠い未来がそうして現在となった時、遠い過去もまた完全に現在化して現われるという時間の円環構造がここで暗示される。過去の現在化がそのように長い時間を必要とするように、現在の現実もまた書くことによって現在化できるようになるためには、それと同じくらいの時間と忍耐とが必要になってくるであろう。見たものをただ書き並べるだけでは現在の現実を現在化したことにはならない。「ぼくは見ることを学んでいるのだから、今、何か仕事を始めなければならないだろうと思う」[32]とマルテは書いているが、「仕事」をしないことには現在の現実もまた現在化され得ず、従って彼はずっと現在の中にいてしかも現在から限りなく遠ざけられ続けていなければならないことになる。では、その「仕事」とは何か。言うまでもなく詩を書くことである。固有の生と死もまた、恐らく詩を書くことによって実現されるに違いないと予想することができる。マルテはこの時点ですでに幾つか詩を書いていたらしいのだが、それらは何の価値もないのも同然だ。「というのは、詩は人々が思っているような感情ではなくて（感情ならば人は若い時に十分持っている）――詩は経験なのだ」[33]から。ここでわれわれは再びあのホフマンスタールのことを思い出す。年少にしてすでにあり余る感情を持っていて、それを言葉に託すことのできた彼はまさに天才詩人だった。だからこそ『チャンドス卿の手紙』から覗い知ることができるように、言葉と事物との関係の破綻という時代の危機をまともに受けねばならなかった。そうして彼は夭折する代わりにそれまでの自分の詩と訣別して新しい可能性を切り開いていくのである。それに対してリルケの方は、同じように時代の危機に襲われていたのだとしても、「詩は感情ではなく経験である」という堅い信念によって、詩作を断念するどころかますます自己の全精力をそこに傾けていくことになる。マルテは詩について続けて次のように言う。

「詩のためには多くの町を見なければならないし、人々や事物を見なければならない。動物を知らなければならない、鳥が飛ぶのを感じなければならない、そして小さな花が朝に開く表情を知らなければならない。見知らぬ地方の道を、思いがけない出会いと遠くからやって来るのが見える別れとを思い返すことができなければならない、――ま

だ明らかになっていない少年時代の日々を、喜びを持って来てくれたのにそれがわからなくて（ほかの子供にとってはそれは喜びだった）心を傷つけてしまったに違いない両親のことを、さまざまな深く重い変化を伴ってまことに奇妙に起こる子供の病気を、静かでしんとした部屋で過ごした日々を、湖のほとりでの朝を、湖そのものを、数々の湖を、高い所でざわざわ音を立てすべての星とともに飛び去った旅の夜を、思い返すことができなければならない。――そしてすべてのことを思い返したとしても、それはまだ十分ではない。どの一つをとっても他の夜とは似ていない数多くの愛の夜を、陣痛に苦しんでいる女の叫び声を、傷が癒えて身重でなくなった白衣の眠っている産婦を、思い出に持たなければならない。しかしまた、死んでいく者の傍にいたことがなければならない、窓が開いていて断続的にガタガタ鳴る部屋で死人の傍に坐っていたことがなければならない。そして思い出を持つことでもまだ十分ではない。思い出が多くなったらそれを忘れることができなければならない。そして思い出が再びやって来るのを待つ大きな忍耐を持っていなければならない。というのは、思い出それ自体はまだ詩ではないからだ。思い出がわれわれの中で血となり眼差となり表情となり、名前を失ってもはやわれわれ自身と区別できなくなってはじめて、その時はじめて、非常に稀な瞬間に詩の最初の言葉がその思い出のまん中に現われ、思い出の中から出てくるのだ。」[34]

かなり長い引用になってしまったが、ここに『マルテの手記』の作者リルケ自身の生涯にわたる詩作過程を要約して覗い知ることができる。それと同時に、これほど長い引用をしたのは、ここに『マルテの手記』が書かれたということの意義が非常によく言い表わされているからである。詩を書くための過程として、まず見ること（但しそれは単に視覚の問題だけではなく感覚全体に関わってくる）が要請され、次に過去の記憶を思い返すことが必要となり、さらにその記憶の中に自分の実際の体験よりももっと多くの思い出が含まれなければならなくなる。しかも思い出が忘れられ、長い時間かかって自己自身と一体化し、そこから詩の言葉が醸成されてくるのを待つ忍耐を最終的には持ち合わせていなければならない。『マルテの手記』自体をその過程の一部に組み込んでしまう。「見ること」から書き始め、過去の記憶を書くことによって思い返し、さらにその後より多くの思い出を持つためにマルテは書き続けることになる。人生の中で経験され実現されていくべきことが、『マルテの手記』という作品世界の中でその語り手は経験し実現していく。この語り手にとって書くという行為、語るという行為は、作品世界の限られ閉ざされた時間の中で、到底実現されるはずもないこと、つまり詩を書くというわずか一つの仕事に集約され象徴されたありとあらゆる意味を解き明かし実現することへと助走することである。そうだとすれば、この語り手にとって、語るという行為以外の一切の行為（Handlung）は意味をなさなくなる。それと同時にこの作品にとっても筋（Handlung）はもはや必要なものではあり得ない。「この若い、取るに足らない外国人であるブリッゲは、五階に身を置いて、昼も夜も書かなければならない、確かに彼は書かなければならないだろう、それが結末だ」[35]とマルテが自分自身を三人称化した時、語り手マルテ自身の存在もまた書くこと、語ることに収束されることになる。それに対応して、マルテの自己意識は自己自身を離れ始め、彼の周囲のパリの現実と彼の内部の記憶の中の少年時代との間を行き来するようになる。しかもただ往復しているのではなく、次第に記憶の中の方に重心が移動していくことが読み取れる。それは言い換えれば、語り手の意識が現在から過去に向かって遠ざかっていくことであり、またより奥深い内面へと沈潜していくことである。もっともそのことはそう簡単に起こるというわけではなく、その経緯に実にリルケの詩的才能がきらめいたりわれわれの関心を惹いたりすることが数多く含まれているのだが、本稿ではその一つ一つを採り上げることのできないのが残念である。

四

以上に述べたことがほぼ『マルテの手記』の作品の構図であり、その構図に沿って「語り」が進行していくものと考えていいわけだが、われわれは語りそのものに内在する力がこの作品の有機的全体を形成する原動力だというようなことを出発点として本稿を書き進めてきた。記憶の中の過去の現実が語り手の意識に向かって現在化しようとする時、同時に語り手の意識の方も現在を離れて過去に向かって逆流していく。この二つの流れが『マルテの手記』の個々の断片の底に流れている。この流れはどことなく現代文学によく現われる「意識の流れ」(stream of consiousness) と似ていなくもない。が、『マルテの手記』におけるこの流れは、語り手自身の意識の根底を浸蝕して、意識そのものを揺さぶり、意識の主体である自己を崩壊し解体する方向に作用する。われわれの見てきた語りの過程は、結局自己の解体過程に近付いていくことになるのである。

「もうしばらくそのことをすべて書き、口にすることにしよう。しかし、ぼくの手がぼく自身から離れてしまう日が来るだろう。そしてぼくがその手に書くことを命じたら、それはぼくの思っていない言葉を書くことだろう。別の説明の時間が始まり、そして言葉が別の言葉に続かなくなり、それぞれの言葉の意味は雲のように解体し、水のように流れていくだろう。だがしかし、非常な恐怖に接しても結局ぼくは何か偉大なものの前に立っている人間のようであり、書き始める前からぼくは、以前によく似たようなことがぼくの中にあったことを思い出す。しかし今度はぼくの方が書かれるのだ。ぼくは変化する印象だ。」[36]

ものを書いている主体であったはずの自己の方が、今度は書かれる方にまわるというのは、ただ主客顚倒として済ませるわけにはいかない。その根底に言葉の意味の解体ということがある以上、言葉にすがって表現するしかない自己もまたその言葉とともに解体しなければなるまい。このことを書いたすぐ後、マルテは医者にも原因のわからない病気にかかってしまうが、その病気による熱は少年時代の病気による熱を呼び戻し、この自己解体に拍車をかけることになる。病気を通じて、今を生きていたはずのマルテの時間が、その少年時間に転換し、過去の体験がそのまま現在の体験と重なり合い同化する。いや、そういう言い方ではまだ真実を穿ってはいない。何故ならば、この病気は「催眠術のような確かさで、過ぎ去ったと思われていた非常に深い危険をそれぞれの患者から引き出してくる」[37]からである。「そしてやって来るものと一緒に、濡れた海藻が沈んだものにまつわりつくように、錯綜した思い出の全くの縺が頭を持上げてくる。一度も経験したことのないような生活が浮かび上がってきて、本当にあったことの間に混じり込んでしまい、よく知っていると思い込んでいた過去のことを押しのけてしまう。というのは起こってくるものの中には、休らった新しい力があり、一方、いつもあったものの方は、あまりにしばしば思い出したために疲れているからだ。」[38]

ここに書き記された病気の症候は、実際に体験したことに加えて体験しなかったことまでも思い出に変えてしまう。しかも体験しなかったことの思い出には、体験したことの思い出にはない新しい力が秘められている。そうして思い出というものが、その二つの色で染め上げられ、もともとあった思い出がそのように塗り変えられていく時、同時にそれらの思い出によって規定されていた自己自身もまた変化することを余儀なくされた。確実にあったはずの過去というものが失われ、代わってその過去の範囲が拡大されより大きな混沌の中に溶け出していく。自己というものもまた、明確な輪郭を失い、本来自己の領域には存在しなかったことまでがその混沌の中で自己と融合し、自己自身ともはや区別のつかないものになっていく。自己解体とは、この意味では自己拡大でもある。先に引用した詩作過程の「思い出がわれわれの中で血となり眼差となり表情となり、名前を失ってもはやわれわれ自身と区別できなくなる」という最終段階は、この自己解体の過程と似ている。ただ違う点

は、この自己解体はまだ始まったばかりであり、詩作過程の最終段階に到達するにはなおまだ気の遠くなるような時間と忍耐とが必要だということである。

このように、思い出というものが自己の体験しなかったことまでもその中に溶かし込んで混沌の様相を呈するということは、一つには語り手の想像力にかかってくることかもしれない。というのも、豊かな想像力が自分自身の体験しなかったことまで、あたかも本当に体験したことでもあるかのように生き生きと描き出すこともあり得るからだ。いや、そういう想像力がなかったならば、そもそも小説などというものは書けないかもしれない。しかし、この場合、単に想像力の問題だけで片付けてしまうわけにはいかない。何故ならば、自分自身の体験しなかったことの思い出は、想像するという言わば客観的な叙述の対象になっているのではなく、確かに存在していた自分の過去にまつわりついて、その確かさを壊し、その上その過去にはない新しい力で以てその過去を脇へ押しのけて思い出そのものにまでなってしまうからだ。想像は所詮想像であって事実ではないが、これは事実以上の重みとエネルギーとを内に持って、自己自身の根底に関わってくる。そうだとすれば、自己解体の過程で現われてくるこれらの思い出は、人間の意識全体の複雑な構造と関係するものでなければならない。

人間の意識というものが全体としてどのような構造を持っているかということは、例えば精神分析学がかなりその奥底にまで光を当てている。われわれが普通に言う「意識」というものは、意識全体のほんの一部、言わば氷山の一角にしかすぎないと言われる。『マルテの手記』の中で、語り手が語るという行為を通じて自己解体し混沌の中へ溶解していくとしたら、それは意識下の世界、意識以前の世界へと入って行くことでもある。その世界では人間存在のより普遍的でより根源的な部分に触れることになるであろうし、その始原の混沌に解体した自己が溶け込んだ後、詩となって再び現われてくるのである。言葉と事物との関係の破綻はまた、このような自己解体への道を開いてくるわけである。

ステファンスの言う第三の層、「歴史的」人物は、このような自己解体の過程で必然的に出会う存在である。語り手自身の体験を超えて歴史上の人物たちの偉大で崇高な体験が、語ることによって語り手自身の体験にとってかわる。歴史上の人物の事蹟を資料と想像力とを駆使して書き上げる歴史小説とは違って、語られる歴史上の人物の体験が言わば語り手自身の原体験となり、存在の基盤に直接関わってくる。だから歴史上の人物に自己をただ単に感情移入するというようなことだけで終わるのではなく、自己の全体、現在と過去とがすでに融合し始めた自己の全体をそこに投げ入れること、そしてさらにそこから再び新しい自己を呼び戻すことが想定されていなければならない。そしてそういう人物たちの偉大さ崇高さに自己の全体が触れた時、その遙か先には人間存在全体にとって恐らく最も大きな最も根本的な最も窮極的な問題がなければならない。それは愛の問題でありまた神の問題である。しかも愛と神とは別々に存在しているのではなく、「愛する者の前にはただ神しかいない」[39]という『手記』の言い方が示す通り、愛をひたすら突き詰めていけばそこに神だけが現われてくるのである。そのような愛は、普通にわれわれが経験できるような愛ではない。恋人同士がどんなに深く愛し合おうとも、人の命に限りがあるならばその愛もまた所詮はその命とともにはかなく消えていくほかあるまい。恋人たちは何の恐れもためらいもなく「永遠の愛」を誓い合うかもしれない。だがしかし、この地上のどこに永遠などというものがあるだろうか。あるとすればそれは人知を遙かに超えた絶対者、神にほかならない。

「愛されていることは燃え尽きることだ。愛することは尽きることのない油で燃える炎だ。愛されることは過ぎ去り、愛することは永続する。」[40]

マルテが『手記』の欄外にそう書き込んだと『手記』の架空の編者は読者に脚註を付している。『手記』の「語り」の過程という言わば自己解体から混沌へと変転していく暗流の中に、この言葉がぽっかりと浮かび上がってくるのである。『手記』の中で語られる何人かの「愛の女た

ち」の「愛」がこの言葉で言い尽くされる。愛されることとは関わりなくひたすら愛することが唯一つ彼女たちに与えられた神に至る可能性だ。そうして『手記』の最後で新約聖書の『放蕩息子』の話が「愛されることを拒もうとした者の伝説」[41]として語られることになる。人から愛され、その愛に恭順なうちは神に至る道から遠ざけられている。放蕩息子は人からでなく神から愛されるために、家を出て愛されることを一途に拒み続けてきた。『マルテの手記』で語られるこの話は、新約聖書の文脈から切り離されて、『手記』における「語り」の内的必然性によって作り変えられている。それは愛と神、あるいはリケル自身のテーマである「所有なき愛」(besitzlose Liebe) というものに「語り」が行き当たった結果である。パリの現実を「見ること」から始まった「語り」がここで遂に人間にとって最も根本的な問題にぶつかってしまったのである。人間というものは、もしかしたら神の天地創造の時そのしめくくりとして、神の愛によって創造されたものであるのかもしれない。もしもそうだとすれば、人間の記憶の中で最も根源的でしかも最も古い記憶は、自分の祖先を泥をこねて創り上げた神の愛の記憶であるに違いない。だから、「愛と神」という問題を超えて、「神の愛」そのものが天地創造の時と同じように再び人間の上に注がれる日を待つことが、次に要請されてこなければならない。

「彼はただ神だけが自分を愛することができるのだと感じていた。しかし神はまだ彼を愛そうとはしなかった。」[42]

『マルテの手記』はこの言葉で完結する。ここで、「神の愛」という窮極のものの姿が見えながらそこに至るべき道の何と遠く絶望的であるかということをわれわれは思い知らされる。いや、そもそもニーチェの言うように「神は死んだ」のかもしれないのだ。

『マルテの手記』における「語り」の過程を追い続けてきたわれわれが、ここに来て何か奇妙な世界を垣間見ることになってしまったが、「神」ということを、これまで問題にしてきた「語り」という観点だけから考えるならば、次のように結論めいたことを言い得るのではないだろうか。「語り」は現実を「見ること」から出発したが、それは主観と客観という古典的対立関係を崩壊させ、意識下の世界というものを浮上させることになった。それは直接的には記憶の中の世界から過去の現実を「思い出す」という形でまず現われたが、その過程が進行するにつれて、語り手の個人的な実際の体験を超えたこと、C・G・ユング流に言えば集合的無意識にまで「思い出」が到達する。『手記』ではそれが例えば歴史的人物を「語る」ということとして現われる。それはまた「人が物語ったのは、本当に物語ったのは、ぼくの時代以前のことだったに違いない」[43]というマルテの認識を出発点として、物語ることのできた過去の時代への回帰をも意味する。現実的時間を逆に回していけばどんどん過去を溯っていくことになる。一方、「思い出す」ことも、自分自身の体験の記憶から、体験しなかったことの思い出へと自己解体していく。その二つの流れの源にあると想定されるものは、天地創造というわれわれの時間の始まりであり、われわれの意識の最も奥深い所に忘れられたその時の神の愛の記憶であろう。「語ること」はこのようにして、意識と時間との流れを溯りつつ、始原の時の忘れられた記憶を思い出すことという極限値を持つことになる。

ここで、『マルテの手記』とほぼ同じ時期にカフカが書いていた『ある戦いの記述』を引き合いに出して考えてみよう。カフカのこの作品の場合にもやはり一人称の語り手が登場する。その意味ではこの作品もまた『マルテの手記』と同じように「一人称小説」の類型にはいるわけだが、ここでは複数の一人称の語り手が次々と現われ、以前の一人称の語り手は聞き手の側に回るかそれとも作品世界の背景に姿を消してしまうことになる。語り手だけが次々と交替して、語りそのものはいつも語られることの周囲を漂っているだけで、語られていることの輪郭も核心も全然明らかになってこない。もちろん『マルテの手記』のように語りが語り手の意識の中に深く入り込んできて意識を解体させその内奥にあるものを浮かび上がらせてくることもない。カフカはやがて一人称の語り手を徹底的に排除することによって彼の語りを完成していくことになる

が、この一人称の語り手にもすでにその萌芽が見られる。カフカは、語り手の内面と語られる対象の核心へと至る両方の道を完全に遮断し、そのわずかに残された語りそのものの隙間に語りだけを自己増殖させ、複雑怪奇で限りなく巨大な裁判所や城といったものを現出させる。それに対してリルケの方は、語り手と語られる対象の両方を互いの内面の奥深くに浸透させ合うことによって、意識の奥底の忘れられた混沌の世界から何か根源的なものを浮かび上がらせようとする。その過程が同時にまた『マルテの手記』の語りの過程であり、またリルケ自身の詩作過程とも呼応している。従ってこの場合、「語ること」は何か始原の時の記憶のようなものを「思い出すこと」と窮極的には一致することになろう。シュタイガーは『詩学の根本概念』の中で、「抒情的様式」(Lyrischer Stil) の本質を「透入」(Erinnerung) という言葉で規定しているが[44]、『マルテの手記』における「語り」(Erzählen) が「思い出すこと」(Erinnern) に限りなく近付いていくとすれば、それは同時にまた抒情的様式へも近付いていくことを意味する。語り手マルテにとっても詩を書くことがそもそも最初からの目標だったわけだが、彼は『手記』におけるこの「語り」を通じてその目標への道を歩いていたことになる。

このようにカフカとリルケにおける「語り」のあり方をごく簡単に概観してみて言えることは、どちらの場合にも『チャンドス卿の手紙』に表わされた言葉と事物との関係の危機、「語り」に関して言えば語り手と語られる事実との関係の危機がその出発点になっているように思われる。いつの時代にも恐らく危機は存在したであろうし、その時代の詩人たちはそれぞれの直観でその危機を感受し、それぞれの言葉で表現したに違いない。この時代の危機が何であったかを言い切ることはできないが、ただ『マルテの手記』に関する限り、語り手自身の自己崩壊を挙げることができるかもしれない。今世紀にはいって、例えば精神分析学が発展してきたことを見てもわかる通り、われわれはもはや素朴にわれわれ自身であることはできない。それがまたその危機を一層困難なものにしているのではないだろうか。

埼玉医科大学準学課程紀要

(一九八一、九、二二、脱稿)

註

(リルケの作品からの引用は、Rainer Maria Rilke Sämtliche Werke. Hg. vom Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke. Besorgt durch Ernst Zinn. Wiesbaden/ Frankfurt am Main, 6 Bände, 1955 bis 1966. により、ページ数は略号 SWI, SWII usw. で示した。なお訳出に際しては禰生書房刊『リルケ全集』を参考にさせて頂いた。)

(1) Vgl. Georg Lukács: „Die Theorie des Romans". Neuwied, 1963.

(2) Vgl. Wolfgang Kayser: „Das sprachliche Kunstwerk. Eine Einführung in die Literaturwissenschaft". Achtzehnte Auflage. Bern/München, 1978.

(3) Vgl. Käte Friedemann: „Die Rolle des Erählers in der Epik". Franz Stanzel: „Die Erzählsituation und das epische Präteritum", Franz Stanzel: „Episches Präteritum, erlebte Rede, historisches Präsens". in Zur Poetik des Romans (Wege der Forschung, Band XXXV.), Herausgegeben von Volker Klotz. Darmstadt, 1969.

(4) Vgl. Franz K. Stanzel: „Typische Formen des Romans". 9. Auflage. Göttingen, 1979.
Franz K. Stanzel: „Theorie des Erzählens". Göttingen, 1979.
彼はこれらの著書の中で三つの Erzählsituation を挙げている。Auktoriale Erzählsituation, Ich-Erzählsituation, Personale Erzählsituation がそれである。ほかに次の論文がある。Käte Hamburger: „Die Logik der Dichtung". 3. Afl. Stuttgart, 1977.

(5) Friedrich Beißner: „Der Erzähler Franz Kafka". Stuttgart, 1952. S. 10

(6) Vgl. Käte Hamburger: „Rilke. Eine Einführung". Stuttgart, 1976. Walter H. Sokel: „Zwischen Existenz und Weltinnenraum: Zum Prozeß der Ent-Ichung im Malte Laurids Brigge". in „Rilke heute. Beziehungen und Wirkungen". Frankfurt am Main, 1975, S. 105-

S. 129 (Zuerst veröffentlicht in : „Probleme des Erzählens. Festschrift für Käte Hamburger zum 75. Geburtstag. Hg. von Fritz Martini". Stuttgart, 1971, S. 212-S. 233.

Katharina Kippenberg : „Rainer Maria Rilke. Ein Beitrag". 4. Ausgabe. Insel Verlag, 1948.

Else Buddeberg ; „Rainer Maria Rilke. Eine innere Biographie". Stuttgart, 1955.

Hermann von Jan : „Rilkes Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge". Leipzig, 1938.

Ernst Fedor Hoffmann : „Zum dichterischen Verfahren in Rilkes Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge". in „Materialien zu Rainer Maria Rilke Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge. Hg. und mit einem Nachwort von Hartmut Engelhardt". 2. Afl. Frankfurt am Main. 1977. S. 214-244 (Zuerst veröffentlicht in DVjs 42, 1968, H. 2, S. 202-230.)

Maurice Betz : „Rilke in Paris". Zürig, 1948.

(7) Vgl. Ulrich Fülleborn : „Form und Sinn der *Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*. Rilkes Prosabuch und der moderne Roman". in : „Deutsche Romantheorien. Beiträge zu einer historischen Poetik des Romans in Deutschland. Hg. und eingeleitet von Reinhold Grimm". Frankturt am Main, 1968. S. 251-273. und in :„Materialien" S. 175-198. (Zuerst veröffentlicht in : „Unterscheidung und Bewahrung. Festschrift für Hermann Kunish zum 60. Geburtstag, Berlin 1961, S. 147-169.)

Judith Ryan :„ >Hypothetisches Erzählen< : Zur Funktion von Phantasie und Einbildung in Rilkes > Malte Laurids Brigge< " in : „Materialien" S. 244-279. (Zuerst in : Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 1971, S. 341-374.)

Brigitte L. Bradley : „Zu Rilkes *Malte Laurids Brigge*". Bern, 1980.

Fritz Martini : „Das Wagnis der Sprache. Interpretation deutscher Prosa von Nietzsche bis Benn". 6. Afl. Stuttgart, 1970. S. 133-175.

Inca Rumold : „Die Verwandlung des Ekels. Zur Funktion der Kunst in Rilkes《Malte Laurids Brigge》und Sartres《La Nausée》". Bonn, 1979.

その他に『マルテの手記』の作品構造を詳細に分析した論文に次のようなものがある。

Anthony R. Stephens : „Rilkes Malte Laurids Brigge. Strukturanalyse des erzählerischen Bewusstseins". Bern und Frankfurt/M.,1974.

(8) Ulrich Fülleborn : a. a. O. in : „Deutsche Romantheorien". S. 271.

(9) Vgl. Rilke Kommentar II von August Stahl unter Mitarbeit von Reiner Marx. München, 1979.

(10) Vgl. Brief an Lili Schalk v. 14. Mai 1911, in : „Materialien" S. 85-87.

(11) Vgl. SW VI S. 949-966.

(12) Ulrich Fülleborn : a. a. O.

Ernst Fedor Hoffmann : a. a. O. S. 226f. und S. 243.

Maurice Blanchot : „》Rilke et l'exigence de la mort《, in : Maurice Blanchot, *L'espace littéraire*, collection Ideés, 1968. S. 151-211 : übersetzt von Hartmut Engelhaldt. in : „Materialien" S. 172-174.

Dieter Schiller : Rainer Maria Rilke : „Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge Der Einsame und seine Welt". in : „Rilke-Studien. Zu Werk und Wirkungsgeschichte". Berlin und Weimar, 1976. S. 138-176. Anthony R. Stephens : a. a. O.

(13) Franz K. Stanzel : „Typische Formen des Roman". S. 25.

(14) Franz K. Stanzel : a. a. O.

(15) Berthold Vietel : „Rilkes Buch". in : Karl Kraus, Die Fackel (1899-1936), Neuausgabe von H. Fischer, München 1973 in : „Materiaien" S. 145-148. S. 148.

(16) Anthony Stephens : a. a. O.

(17) Vgl. SWVI 721.

(18) SWVI 728.

(19) SWVI 709.

(20) SWVI 710f.

(21) SWVI 711.

(22) Hugo von Hofmannsthal : „Gesammelte Werke". in zehn Einzelbänden Erzählungen, Erfundenene Gespräche und Briefe, Reisen". Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 1979. S. 466.

(23) SWVI 723f.

(24) 例えばホフマンスタールとリルケを比較して論じたものに次の論文がある。
Joachim W. Storck : „Hofmannsthal und Rilke. Eine östereichische Antinomie. in : „Rilke heute. Beziehungen und Wirkungen". Zweiter Band. Frankfurt am Main, 1976. S. 115-167.

(25) SWVI 713.

(26) SWVI 714.

(27) SWVI 713.

(28) SWVI 715.

(29) SWVI 721.

(30) SWVI 715-721.

(31) SWVI 721.

(32) SWVI 723.

(33) SWVI 723f.

(34) SWVI 724f.

(35) SWVI 728.

(36) SWVI 756.

(37) SWVI 766.

(38) SWVI 766.

(39) SWVI 924.

(40) SWVI 937.

(41) SWVI 938.

(42) SWVI 946.

(43) SWVI 844.

(44) Vgl. Emil Staiger : „Grundbegriffe der Poetik". 3. Afl. 1975 (dtv) (Zuerst veröffentlicht in Zürig, 1946). なお「透人」という訳語は高橋英夫氏の訳を借用した。

参考文献

(1) リルケの作品・手紙等

Rainer Maria Rilke Sämtlichewerke. Hg. vom Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke. Besorgt durch Ernst Zinn. Wiesbaden/Frankfurt am Main, 6 Bde, 1955 bis 1966.

Rainer Maria Rilke : Über Dichtung und Kunst. Edition und Nachwort von Hartmut Engelhardt. Bibliothek Suhrkamp, 1974.

Rainer Maria Rilke : Briefe. Wiesbaden, 1980.

Hugo von Hofmannsthal Rainer Maria Rilke : Briefwechsel 1899-1925. Hg. von Rudolf Hirsch und Ingeborg Schnack. Frankfurt am Main, 1978.

Rainer Maria Rilke Inga Junghanns : Briefwechsel. Wiesbaden, 1959.

Rainer Maria Rilke : Briefe an Axel Juncker. Hg. von Renate Scharffenberg. Frankfurt am Main, 1979.

Rainer Maria Rilke Katharina Kippenberg : Briefwechsel. Wiesbaden, 1954.

Rainer Maria Rilke : Briefe an Sidonie Nádherny von Borutin. Hg. von Bernhard Blume. Frankfurt am Main, 1973.

Rainer Maria Rilke Helene von Nostitz : Briefwechsel. Hg. von Oswald von Nostitz. Frankfurt am Main, 1976.

Rainer Maria Rilke Lou Andreas-Salomé : Briefwechsel. Hg. von Ernst Pfeiffer. 2. Afl. Frankfurt am Main, 1979.

Rainer Maria Rilke : Die Briefe an Gräfin Sizzo 1921-1926. Hg. von Ingeborg Schnack. Erweiterte Neuausgabe. Frankfurt am Main, 1977.

Rainer Maria Rilke : Briefe an Nanny Wunderly-Volkart. 2Bde. In Auftrag der Schweizerischen Landesbibliothek und unter Mitarbeit von Niklaus Bigler besorgt durch Rätus Luck. Frankfurt am Main, 1977.

リルケ全集　全7巻　彌生書房　一九七三―一九七四。

(2) 註釈・年譜・伝記等

Materialien zu Rainer Maria Rilke 〉Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge〈 Herausgegeben und mit einem Nachwort von Hartmut Engelhardt. 2. Afl. Frankfurt am Main, 1977.

Materialien zu Rainer Maria Rilke 〉Duineser Elegien〈 Herausgegeben von Ulrich Fülleborn und Manfred Engel. 1. Band. Zeugnisse. Frankfurt am Main, 1980.

Rilke-Kommentar zum lyrischen Werk von August Stahl unter Mitarbeit von Werner Jost und Reiner Marx. München, 1978

Rilke-Kommentar zu den 〉Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge〈, zur erzählerischen Prosa, zu den essayitischen Schriften und zum dramatischen Werk von August Stahl unter Mitarbeit von Reiner Marx. München, 1979.

Ingeborg Schnack : Rainer Maria Rilke Chronik seines Lebens und seines Werkes. 2 Bde. Frankfurt am Main, 1975.

Hans Egon Holthusen : Rainer Maria Rilke in Selbstbezeugnissen und Bilddokumenten. Hamburg, 1958.

Else Buddeberg : Rainer Maria Rilke. Eine innere Biographie. Stuttgart, 1955.

Katharina Kippenberg : Rainer Maria Rilke. Ein Beitrag. 4. Ausgabe. Insel Verlag, 1948.

Index zu Rainer Maria Rilke : Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge. Bearbeitet von Russell E. Brown. Frankfurt am Main, 1971.

(3) リルケについての論文

Rilke heute. Beziehungen und Wirkungen. Hg. von Ingeborg H. Solbrig und Joachim W. Storck. Frankfurt am Main, 1975.

Rilke heute. Beziehungen und Wirkungen. Zweiter Band. Frankfurt am Main, 1976.

Rilke in neuer Sicht. Hg. von Käte Hamburger. Stuttgart, 1971.

Rilke-Studien. Zu Werk und Wirkungsgeschichte. Berlin und Weimar, 1976.

Betz, Maurice : Rilke in Paris. Zürich, 1948.

Bradley, Brigitte L. : Zu Rilkes Malte Laurids Brigge. Bern, 1980.

Emde, Ursula : Rilke und Rodin. Marburg/Lahn, 1949.

Eppelsheimer, Rudolf : Rilkes larische Landschaft. Eine Deutung des Gesamtwerkes mit besonderem Bezug auf die mittlere Periode. Stuttgart, 1975.

Hamburger, Käte : Rilke. Eine Einführung. Stuttgart, 1976.

Goth, Maia : Rilke und Valéry. Aspekte ihrer Poetik. Bern, 1981.

Günther, Werner : Weltinnenraum. Die Dichtung Rainer Maria Rilkes. 2. Afl. Berlin, 1952.

Jan, Hermann von : Rilkes Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge. Leipzig, 1938.

Kunz, Marcel : Narziß. Untersuchungen zum Werk Rainer Maria Rilkes. Bonn, 1970.

Rumold, Inca : Die Verwandlung des Ekels. Zur Funktion der Kunst in Rilkes 〈 Malte Laurids Brigge 〉 und Sartres 〈La Nausée〉. Bonn, 1979.

Ryan, Judith : Umschlag und Verwandlung. Poetische Struktur und Dichtungstheorie in R. M. Rilkes Lyrik der mittleren Periode (1907-1914). München, 1972.

Salis, J. R. von : Rainer Maria Rilkes Schweizer Jahre. Ein Beitrag zur Rilkes Spätzeit. 3. Afl. Frauenfeld, 1952.

Schütze, Alfred : Rainer Maria Rilke. Ein Wissender des Herzens. 2. Afl. Stuttgart, 1975.

Stephens, Anthony : Nacht, Mensch und Engel. Rainer Maria Rilkes Gedichte an die Nacht. Frankfurt am Main, 1978.

Stephens, Anthony : Rilkes Malte Laurids Brigge. Strukturanalyse des erzählerischen Bewußtseins. Bern und Frankfurt/M, 1974.

Webb, Karl Eugene : Rainer Maria Rilke and Jugendstil. Affinities, Influences, Adaptations. North Carolina, 1978.

ゾーダ・アレマン『リルケ——時間と形象』山本定祐訳　国文社　一九七七

『リルケ論集』塚越敏・田口義弘編　国文社　一九七六
『リルケ――変容の詩人』小松原千里・平子義雄編　クヴェレ会　一九七七
『わがリルケ』高安国世　新潮社　一九七七

文学理論・その他

Zur Poetik des Romans. Hg. von Volker Klotz. Wege der Forschung Band XXXV. Darmstadt, 1969.

Deutsche Romantheorien. Beiträge zu einer historischen Poetik des Romans in Deutschland. Herausgegeben und eingeleitet von Reinhold Grimm. Frankfurt am Main, 1968.

Deutsche Literatur Kritik. Vom Kaiserreich bis zum Ende der Weimarer Republik (1889-1933). Hg. von Hans Mayer. Frankfurt am Main, 1978.

Erzählte Welt. Studien zur Epik des 20. Jahrhunderts. Hg. von Helmut Brandt und Nodar Kakabadse. Berlin und Weimar, 1978.

Anton, Herbert : Die Romankunst Thomas Manns. Begriffe und hermeneutische Strukturen. Paderborn, 1972.

Beißner, Friedrich : Der Erzähler Franz Kafka. Stuttgart, 1952.

Glaser, Hermann : Literatur des 20. Jahrhunderts in Motiven. Band I : 1870-1918. Band II : 1918-1933. München, 1978, 1979.

Hamburger, Käte : Die Logik der Dichtung. 3. Afl. Stuttgart, 1977.

Hillebrand, Bruno : Theorie des Romans. Überarbeitete und erweiterte Ausgabe. München, 1980.

Jurgensen, Manfred : Das fiktionale Ich. Untersuchungen zum Tagebuch. Bern, 1979.

Kayser, Wolfgang : Entstehung und Krise des modernen Romans. 3. Afl. Stuttgart, 1961.

Kayser, Wolfgang : Das sprachliche Kunstwerk. Eine Einführung in die Literaturwissenschaft. 18. Afl. Bern/München, 1978.

Martini, Fritz : Das Wagnis der Sprache. Interpretation deutscher Prosa von Nietzsche bis Benn. 6. Afl. Stuttgart, 1970.

Piel, Edgar : Der Schrecken der wahren Wirklichkeit. Das Problem der Subjektivität in der modernen Literatur. München, 1978.

Steiger, Emil : Grundbegriffe der Poetik. 3. Afl. München (dtv), 1975.

Stanzel, Franz K : Typische Formen des Romans. 9. Afl. Göttingen, 1979.

Stanzel, Franz K. : Theorie des Erzählens. Göttingen, 1979.

Strelka, Joseph : Auf der Suche nach dem verlorenen Selbst. Zu deutscher Erzählprosa des 20. Jahrhunderts. Bern, 1977.

Theile, Wolfgang : Immanente Poetik des Romans. Darmstadt, 1980.

Walser, Martin : Wer ist ein Schriftsteller? Aufsätze und Reden. Frankfurt am Main, 1979.

Franz Kafka : Gesammelte Werke. Hg. von Max Brod. Beschreibung eines Kampfes. Novellen. Skizzen. Aphorismen aus dem Nahlaß. 2. Afl. Frankfurt am Main, 1980.

Hugo von Hofmannsthal : Gesammelte Werke in zehn Bänden. Erzählungen, erfundene Gespräche und Briefe, Reisen. Hg. von Bernd Schoeller in Beratung mit Rudolf Hirsch. Frankfurt am Main, 1979.

『詩学の根本概念』　エーミール・シュタイガー著　高橋英夫訳　法政大学出版局　一九六九
『物語の構造分析』ロラン・バルト著　花輪光訳　みすず書房　一九七九
『詩学序説』　新田博衛　勁草書房　一九八〇
『ヴォルプスヴェーデふたたび』　種村季弘　筑摩書房　一九八〇
『高橋義孝文芸理論著作集上』　人文書院　一九七七
『無意識の心理』　C・G・ユング著　高橋義孝訳　人文書院　一九七七